

『経済的思考の転回

—世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜—』

本書は、オットー・ノイラートの社会エネルギー論を中心に、「経済学の脱自然化」の大きな

趨勢の中で忘れられた「〈経済〉なるものの存立条件を自然の物質的な相互依存関係にまで掘り下げてトータルに把握することを試みた経済思想の系譜」(本書, 3頁)に光を当てようとするものである。

ノイラートは論理実証主義を標榜した「ウィーン学団」のメンバーとして有名だが、その経済思想が主題的に取り上げられることはそれほど多くない。といっても、本書の意図は単なる忘れられたマイナーな経済思想の掘り起しといった好事家的な落穂拾いではない。経済活動に対する環境制約といったきわめて現代的な問題関心の下で、選択の学としての主流派経済学の系譜とは異なる、人々の経済生活の実質的基礎の探求という経済認識の系譜を差し示そうとする、きわめて野心的な試みだ。

以下、まず各章で展開される検討のあらましを見たい。本書の意義について考えることとしたい。

第1章「生物経済学の源流」では、物理学における熱力学原理の発見が同時代の生命や社会の認識にどのような変容をもたらしたのかが、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期の思想家であるオストヴェルト、ゲデス、ソデイらの思索に即して検討される。熱力学の展開とその意義を跡付けた後、そうした同時代の自然科学の成果を社会分析や政治経済学に導入し、とりわけ経済学に内在的な議論を展開したパトリック・ゲデスとフレデリック・ソデイに焦点があてられる。そして彼らが後にハイエクに批判されたような単純な科学主義ではない、〈経済〉の存立条件についての深い思索を提示していたことが示される。つづく第2章(第3章)第4章では、ノイラートの経済思想の再考をふまえたうえで、いわゆる社会主義経済計算論争におけるその批判者たちとのやり取りの意味の再解釈がなされる。

第2章「自然経済の理論——オットー・ノイラートの経済思想」では、まず社会主義経済計算論争に対する標準的解釈からラヴォアらの新しい解釈への流れを参照したうえで、そうした解釈の転換が、実は1920年代の重要な議論を埒外に置

いてしまうことに注意を喚起する。そして1910年代の論考を丁寧に跡付けるなかで、ノイラートがいかに関心として経済学の認識論的な枠組みや理論的な幅を拡張しようと試みていたのかが示される。この作業を通じて浮かび上がるのは、論理実証主義の思想家という一般的なノイラート像とは異なるその描像である。ノイラートが歴史学派の薫陶を受け、古代経済史を研究したこと、住宅や食料の草の根の集団的自給のための運動の組織化に関わった実践家としての側面、そしてウィーン学団の一員でありながらいわゆる「原子プロトコル言明」の歴史的・社会的性格を強調していたことなどが紹介的に検討されるなかで、思想的はいささか浅薄といった論理実証主義の一般的なイメージとは異なる、厚みのあるノイラート像が提示される。そして第3章「経済的統治の論法——エコノミーからカタラクシーへ」では、社会主義経済計算論争におけるハイエクの特異な位置づけが確認される。当初ミゼスが実物タームによる合理的な経済計算の不可能性を指摘し、またハイエクやロビンズもその実行不可能性を指摘していたのに対し、ランゲは試行錯誤法による計算可能性を主張した。しかしハイエクは論争のプロセスを通じて、こうした計算合理性の問題から、互いに異質で共約不可能な知識・認識価値を持つ諸個人の共同の可能性という知識論的・認識論的問題へと主題設定を転換した。知識の分業システムとしての市場理解に基づきハイエクが問題にしたのは、社会主義における「統治合理性の欠如」であった。計画経済における経済統治者は、社会全体の知識を原理的に手に入れることはできないし、またその社会工学的視点は自由な社会における目的や価値の多元性を否定することになってしまう。それゆえハイエクは市場をカタラクシーと呼び称揚すると共に、エコノミーを目的秩序として多元的価値の共存する余地のないものとして捉える。そしてこの区別こそが、ハイエクとノイラートが立場を異にしつつ交差する領域ということになる。

第4章「オイコノミアと自然の理法」では、ノイラートとハイエクに見出さる共通点が指摘されるなかで、ノイラートの経済思想の意義が論じ

られる。ノイラートにとっての経済問題が自然生態系との物質的な諸関係を含む〈オイコノミア〉の統治という観点から捉えられるとしたうえで、そうした狭義の経済問題を超越するノイラートの立場（たとえばノイラートによる真の合理主義と似非合理主義の区別に基づく後者の批判）は、ハイエグの反合理主義と相通じるものだとされる。またノイラートは「収益性」と異なる経済性の意義を強調し、実物タリムによる経済計算の必要性を主張するが、これはカップやガール・ポランニーにもみられる形式経済学を批判する「実質経済学」の探求として位置付けられる。そしてノイラートが目指すのは、自由と計画の分極的な二分法にもとづくのではなく、自由の生産ないし自由な生き方のオラケストレーションのための条件の探求だとされる。

さて以上で概観した本書は2つの点で通説の転換を意識したものといえるだろう。第1にノイラートの経済思想の検討を通じて20世紀の経済思想史についての新しい解釈図式を提示すること、第2に主流派の経済学とは異なる視点から経済を捉える視座の可能性の提示である。

20世紀の経済思想史を考えるうえで伝統的な対立図式は、自由対計画である。この図式のなかでノイラートは、一般に計画の側に位置付けられる。しかし本書が繰り返し強調するのは、ノイラートの思想がそのような単純な対立図式に位置付けられて事足りるとされるようなものではなかったこと、そしてそれは価格分析を中心とした主流派の経済学とは異なる実質経済学ともいえるべき思想系譜に位置付けられる、豊饒な可能性をもったものであったことである。ノイラートがその一端に連なるとされる実質経済学の系譜を描き出す本書はいわば、経済思想史における“排除された知”の系譜を浮かびあがらせたものといえる。これは経済をめぐる言説の歴史的研究に新しい光を当てるものと評価できるだろう。

しかし本書の意義はそれにとどまるものではない。本書の魅力とは、以上のような経済をめぐる思想史の読み替えの試みを通じて、価格分析を中心とした経済学とは異なるもうひとつの経済学の可能性についての想像力を喚起する点だろう。こ

れは本書で用いられた表現で言えば、「〈経済〉の脱構築」（141頁）の試みであり、往年の玉野井芳郎による「広義の経済学」に連なるような、いわば経済本質論の試みとっていいだろう。

本書のこうした試みとその魅力は、経済領域における思想研究の可能性、あるいは人文的知性のあり方についてきわめて強い示唆を与えるものでもある。近年、大学における哲学や思想史といった人文学的な学問に対する批判的評価がさまざまなかたちでなされるようになった。こうした傾向は、社会科学における歴史や思想史、方法論といった人文学的なアプローチをとる分野に対しても向けられている。

本書の思想史のアプローチによる経済本質論の試みは、社会における経済的なるものの意味や経済学という知的体系の含意について、外部からの視点を参照しながら考える必要性をあらためて認識させるものとなっている。これは別の言い方をすれば、哲学的な人文知の視点から、単なる忌避とも単なる称揚とも異なる、経済学的な知の「適切な位置づけ」を試みる姿勢といえるのではないだろうか。本書の試みは、経済学という知的体系の意味を再考するうえで、そして社会科学における人文的知の可能性を考えるうえで、極めて示唆に富む挑戦的な試みといえるだろう。

〔以文社・2014年・277+35頁〕

（佐藤方宣・関西大学）